出会いは世界を広げていく

交流会を通して

第5回

土肥いつき DOHI ITSUKI
京都の公立高校教員。24時間一人パレード状態のトランス女性。趣味の交流会運営で右往左往する日々を送っている。

介入か放任か

７月号には、わたしのはじめてのカウンセラー経験を書きました。わたしがはじめて担当したグループは団結力も強く、メンバーたちは大盛り上がりをしてくれました。おそらくはじめてのカウンセラー経験は、成功だったと思います。ただ、自分の中には疑問がありました。それは、グループをまとめようとするあまり、わたしがやろうとしたことを押しつけたのではないか、メンバーたちは本当はそれぞれが自分のやりたいことを持っていたのではないかということでした。

翌年、わたしは再び「やまびこキャンプ」でカウンセラーをすることになりました。２回目のカウンセラーは、前年とはまったく違うチャレンジをしようと思いました。この時も、２日目はプログラムが用意されていないフリーの日でした。前年はわたしが先頭に立ってメンバーを盛り上げましたが、この年は「やりたいことをやって１日過ごそう」と提案しました。やりたいことをやると言っても、メンバーたちは何をすればいいかわかりません。そこでわたしは「自分はブーメランをつくるわ」と言って、薄い薪を持ってきて、ナタで削りはじめました。そんなわたしを見て、メンバーたちも思い思いのことをはじめました。あるメンバーは、鍵型になった枝と長めの枝を拾ってきて、それに紐をくくりつけて、釣りをはじめました。キャンプサイトには小川が流れていました。ただ、魚がいる気配はまったくありません。「釣れる？」と聞くと、そのメンバーは「ううん」と答えますが、釣りをやめようとはしませんでした。別のメンバーは薄い石を拾ってきて、それを削ってナイフをつくりはじめました。わたしもブーメランを投げては「帰ってこないなぁ」とつぶやき、また削るということを繰り返しました。

やがて昼ごはんのカレーをつくる時間がきました。でも、メンバーたちはまったくつくろうとしません。そんな光景を見かねたのか、マネージメントスタッフがやってきて、小川の上に「川床」をつくって、「カレーをつくってここで食べよう」と言ってくれました。それを見て、メンバーたちはようやくカレーをつくりはじめました。

そんなグループ運営をしたので、もちろんグループとしてのまとまりは、あまりありませんでした。キャンプが終わり「さすがに放っておきすぎたかな」と思いました。２回目のカウンセラー経験は、マネージメントスタッフの助けをかりたということもあったし、なによりグループづくりという意味で、おそらくは失敗だったと思います。しかし、最終日のメンバーたちは、みんな「４日間、遊んだ」という顔をしていました。その顔を思い出した時、本当に失敗だったんだろうかとも思いました。

グループづくりに必要なのは介入なのか放任なのか、その答えが出ないまま、その翌年、プログラム進行のチーフであるプログラムディレクターを任されることになりました。もちろんディレクターを担当するのははじめてでした。ただ、「やまびこキャンプ」には経験豊かな先輩リーダーがいました。そんな人たちに支えてもらいながら、ディレクターをすることになりました。このプログラムディレクターの経験が、グループづくりに必要なことを教えてくれた気がします。

プログラムディレクターの最初の、そして一番大切な仕事はキャンプ全体のプログラムをつくることです。プログラムの中身は、その年にボランティアとして参加してくれるリーダーのキャンプ経験によって異なります。経験豊富なリーダーがたくさんいればプログラムの自由度が上がると思いますが、必ずしもそうとは限りません。一方、キャンプの裏方を支えるマネージメントスタッフの仕事の中には、例えばキャンプファイアーの薪組などがあり、一定程度のキャンプのスキルが必要となります。そのため、カウンセラーは通常、あまりキャンプ経験がない人が担当することになります。このような場合、キャンプ全体のプログラムづくりがとても重要になります。なぜなら、プログラム進行によってグループづくりをサポートする必要があるからです。そこで、次号にはこの時に学んだプログラムづくりについて書こうと思います。